



2010年、丸山常生とカナダケベック・graveにアーティスト・イン・レジデンスとして一ヶ月あまり滞在した際、多くのパフォーマーが存在し、パフォーマンス・フェスティバルが独立して開かれていることに驚かされたのが未だ記憶に新しい。日本ではパフォーマンス・フェスティバルといっても、結局ダンスだったり演劇だったりするからだ。パフォーマンス・アートとはメソッドを必要とせず、概念では伝えられない新しい発想を提示し、日常と常識という目が曇った状態を開くことに主眼がある。M・デュシャン、J・ボイスは対極にあるけれども、この主張に変化はない。

素材を必要としないパフォーマンス・アートは、アジアで盛んだと言われている。しかし、民主主義ではなく、経済競争的資本主義が全世界を席卷するにつれて、アートと日常は商品と化し、この世で裕福に暮らせるための装置に成り下がった。このような動向の中で、霜田誠二は、アジア、ヨーロッパと世界を股に架けて活動し、多くの共感と評価を受けている。パフォーマーの霜田がギャラリーで展覧会することは当たり前のことであり、夏休みを主題とした絵画作品は完売した。霜田は追加で作品を作成し、ギャラリーに展示した。

90分パフォーマンスをトータル6回行ったが、忙しさにかまけて私は一回も行けなかったことを、霜田とギャラリーの吉岡に本当にお詫びしたい。しかし、作品を見にギャラリーを訪れた際、霜田が其処に居るだけで作品と化していたことに、とても驚いた。それは、霜田が特別なオーラを放っていたのではない。霜田は「居る」ということだけで、パフォーマンスとなるのだ。

パフォーマンスとは特別なことをすることではない。パフォーマンスを「する」と意識することによって、パフォーマンスとなる。パフォーマンスという芸術が一過性では済

まされずにそこにいなくとも共有することが可能となるのだ。

日記風の手書きの文字と、押し花で制作された作品を所有することによって、霜田のパフォーマンスを常に共有することが出来る。そのような発想から作品が多くの人手に渡ったのは、普段からの霜田の活動の積み上げの証となるのであろう。

作品と同じく、霜田はパフォーマンスにおいても、特別なことは何もしない。日常の動作であるにも関わらず、日常では発生しない状態を生み出していく。それは、パフォーマンスが終わると消えるわけではないが、霜田のパフォーマンスの存在を知らない限りは理解し得ない行為となる。

我々はパフォーマンスだけではなく、美術が持つ本来の力を思い出し、呼び起こし、信じ、自己を変革する術を忘れてはならない。この国の動向と闘争すべきなのだ。

